

第6回 個人部門

最優秀賞

「国境を越えて」

福岡県立明善高等学校 2年

山田広美さん

635・269人。この莫大な数は2000年現在の在日朝鮮人の人数である。日本の朝鮮支配の結果、日本に渡航したり、戦時中に労働力として強制連行され、戦後の南北朝鮮の分裂、持帰り資産の制限などにより、日本に残留せざるをえなくなったりした朝鮮人とその子孫、韓国籍または、北朝鮮籍をもつ日本在住者はこれだけいるのだ。そして私は、その一人としてこの世に生を受けた。

『韓国』。この国は日本の人々にとつてどのような国なのだろうか。私には、一番近い国であり、一番遠い国。そんな印象を与える存在でもあった。そして、韓国人が歴史上差別や偏見を受けてきたこと、また、今もなおそれは残り、両国の歴史的認識の違いが存在するのも事実だ。

『韓流』と言う言葉が生まれ、日本に社会現象を巻き起こしたとも言われる韓国ドラマの日本進出は、まだ人々の記憶に新しいことと思う。メディアの力は大きいものだ。明らかに日本人の韓国に対する興味と関心、理解力は変わってきた。どんな教育よりも、大きな力をもつといつても過言ではないだろう。そして、ここまで早く韓国という国が受け入れられる時代が来るとは、日本人が、韓国人ですら想像もしなかったことである。このことは、日本がどこかに置き忘れてきた隣国の情緒に共感しているのかもしれない。

また、多くの在日は、母国語もできず、日本人と生活習慣も似ている。日本人に「日本人と変わらないじゃない」と言わ

れても、ついつい苦笑いをしてしまう。日本で生まれ、日本で育ち、日本の国籍を持ちながらも韓国人の血が流れている。確かに標準的な日本人の環境からは離れている。しかし、標準的ではないからこそ、できることがあるのだと思う。私はさまざまな経験をしてきた。言葉の壁というものは、想像以上に厚いものなのだ。確かに、生きていくうえで、在日韓国人として暮らすことは、少なからず辛いことはある。そのことで、幼い私は、親を恨んだこともあった。

一 日本と韓国、どちらが母国なのか。

私にとっては両方である。私は時代が変わってきた今だからこそ、堂々と言うことができるのだろう。

日本人として日本を見ること、韓国人として韓国を見ること、そして、日本人として韓国を見て韓国人として日本を見るのが私にはできるのだ。外国理解。日本だけでなく、世界全体にとって、確かに難しい問題ではある。しかし、決して乗り越えられない問題ではない。時代は変わるのだ。第二次世界大戦からめぐるしく世界が変わった時のように、これからの時代は私たちが中心となって、日本を、そして世界を動かしていかなければならないのだ。

私は二つの国を通して決心する。共通の物差しをもち、言葉を越えて、国境を越えて、両国が、そして世界の国々がお互いを理解し合える世界の架け橋となっていきたい。

個人部門 優秀賞

「途上国における私の存在意義」

熊本県立菊池農業高等学校3年

岡部 奈実子さん

生物資源の利用を学んできた私は、それを生かして何かできないかと模索していました。そんな時、体に電流が走ったかのように、私のすべてが反応し「これだ！」と叫んだものがありました。それが「フェアトレード」というものでした。

「フェアトレード」とは「公正な取引」を意味し、途上国と先進国との貿易の間に生じる様々な問題を解決し、公平な貿易を行おうという取り組みです。私は、フェアトレードの取り組みにとっても共感し、今までの経験を生かして「フェアトレード」と「生物資源」を結びつけ、弱い立場の人々の助けにならないければ、という使命感に駆られたのです。

私は今までの人生でたくさんのごことを学んできました。両親は木工業を営んでおり、天然の木肌と木目を生かした家具などを作り、人に喜んで買ってもらうことで生計を立てています。そして、自然をとっても愛する人たちで、幼い私を海へ、山へと連れて行き、多くの自然と触れ合わせてくれました。現在は、雄大な阿蘇の山々に囲まれた場所に家を構え、そこでの暮らしを満喫しています。そんな中で私は、「モノづくり」の大切さと「自然」の素晴らしさを体で感じてきました。

そして私は、自然と人とが深く関わる「農」と「食」に興味を持ち、教科書を学ぶだけではなく、土と直に触れ合うことができる農業高校への進学を決めました。入学当初から、専門教科の基礎と応用を自分の知識と技術として身につけるため、農業鑑定という専門教科の学習成果を競う競技に参加しました。その結果、県大会で二年連続最優秀賞を獲得し、全国大会では優秀賞を取ることがで

きました。更に、世界の「食」についても研究してみようと思い、インドネシアなどで食されている大豆発酵食品「テンペ」を調査し、プロジェクト発表県大会で発表するまでに至りました。テンペは日本という納豆で、非常に栄養価の高い食品です。東南アジアでこんなに優れたものがあるということに驚き、それと同時に「発展途上国なんか」と無意識のうちに途上国を見下していた自分に気が付きました。

これがきっかけで東南アジアなどの途上国に興味を持ち始め、いろいろな情報を得ていくうちに先進国と途上国との「不公平貿易」を知りました。そして、大きな要因は先進国の「技術向上」にある「経済発展」と「使い捨ての文化」にあると考えるに至りました。

バイオテクノロジーなどが進歩し、重病を治す新薬の研究開発が数多く行われています。未開発な途上国は新薬原料の宝庫と考えられ、有用成分の含有が突き止められると、先住民の許しもなく大量に奪取されています。突然、重要な食料源、収入源を失ってしまうなど理不尽な話です。進んだ生物資源利用方法も喜ぶ人がいる一方で、悲しむ人がいるのなら、それは、植民地政策と同じではないでしょうか。

先進国のものの考え方は「壊れたら新しいものを買えばいい」というもので、安価な大量生産が望まれています。そのため、途上国の人々は「搾取工場」と呼ばれる劣悪な労働条件のもとで働き、農薬の使用によって環境汚染も進んでいます。私たち先進国は、途上国を踏み台にして発展してきたといっても過言ではありません。だからこそ、その利益は途上国にも分配されるべきだと強く思うのです。各々の幸せを平等に近づける

ためには、先進国の思いやりが必要と考
えます。そのために私は身を捧げていこ
うと決意しました。

今後は、大学で更に専門的な知識と、
国際社会について深く学び、「生物資源」
を利用したフェアトレードのあり方を
考え、普及に力を入れていきたいと思っ
ています。まずは私から日本に、そして
世界中に浸透させることが目標です。そ
の為に新たなNPO団体を立ち上げ、小
さな一歩を踏み出せるよう、本物の「学
問」を身につけたいのです。途上国の
人々の誰もが、私の名前を親しげに呼ん
でくれる、そんな存在になることが私の
夢です。

個人部門 審査委員特別賞

「中絶した夢を定時制高校で」

沖縄県立宮古島高等学校 定時制3
年

與那覇 和恵さん

五年前、私は全日制に通う高校2年生
でした。その年の夏休み、部活の合宿中
に私は気分が悪くなり病院で診察を受
けました。そして脳腫瘍という病名を
告げられたのです。入院して手術を受け
ました。治療のため学校は休学し、その
後いろいろな事情から母のふるさとの
宮古島に引越しました。学校がとても遠
いところになってしまいました。

去年の3月、母とドライブしていた時
のことです。偶然宮古高校の前を通りま
した。すると母は突然Uターンして校門
の前に車を止め、「和恵、この高校にま
だ定時制はあるか聞いておいで」と言う
のです。私はとにかく車を降りて事務室
まで走りました。廊下の窓から「宮古高
校にはまだ定時制がありますか」と聞く
と事務の方が「あと2年でなくなりませ

がまだありますよ。」と教えてくれたの
です。

それから数日後、私は2週間の体験入
学を終えて2年生に編入しました。20
歳になっていた私は10代の人たちと
やっていけるか不安もありましたが、そ
れ以上にまた学校に通えることが嬉し
くてたまりませんでした。

宮古高校定時制は生徒数34名。特に
3年生は珠算・電卓で全国優勝、スポー
ツで県大会優勝という実績がありまし
た。ハンドボールをやっていた頃が懐か
しく思い出されました。2年生は16名
で授業中結構まじめでした。課題がある
と椅子を移動して2、3人のグループが
自然とできて、みんな考えてる雰囲気
でした。クラスメイトは、中学の時保健室
登校した人や畑仕事をしてから真っ黒
になって登校する人、毎日1時間早く来
て職員室で先生と勉強している人など
様々。ただ一人だけ皆勤で頑張っている
人もいて、みんなからエールをうけてい
ます。

編入はしましたが、去年も今年も、私
は長い入院をしました。そんな私をクラ
スメイトや先生方が見舞いに来てくれ
ます。担任の先生は一日も欠かさず来
てくれました。まだ臨時任用の先生でし
たが、私にとって本物の先生でした。退
院後も私は毎日薬が必要な日々ですが、
2時間目の途中の薬の時間が近づく
と誰かが「時間だよ。」小声で教えてくれ
る、そんなクラスです。

私は元々福祉の仕事がしたくて学校
も総合学科に通っていました。病気で休
学していた時も市の主催する講習を受
けて介護ヘルパー3級の資格も取りま
した。求人票にあった「高校卒業以上」
の条件ももうすぐ満たすことができる
ので、夢の実現に具体的に近づくつもり

です。これからの仕事はコンピュータ化されるのでコンピュータは是非やってみたいと思いつつもその機会はありませんでした。それが今コンピュータが並んだ教室で先生の指導を受けて勉強することができるのです。一度学校が遠くなると学校の良さがよくわかります。宮古高校定時制にはハンセン病で進学をあきらめた人が50年後に62歳で入学した事もあるそうです。その方は卒業の時、「ハンセン病の療養所から通えた宮古高校定時制は日本一、いや世界一の学校だ」と語ったそうです。私にとっても心強い所です。今年は学園祭でフリーマーケット・文芸作品展・理科ゲームなどをしました。「定時制の所までお客さんは来ない」と言う人もいましたが、けっこう大勢来てくれました。

五年前、病気について詳しく聞かされていなかったので、手術の麻酔から覚めて、お医者さんに「見えますか」と聞かれた時の恐怖はまだ忘れていません。幸いに目は見えるし、治療のため抜けた髪の毛も元通りです。病気が完治した今、あの時宮古高校の正門に車を停めた母に感謝しながら、そして来年なくなってしまう宮古高校定時制に感謝しながら、福祉の仕事に就く夢を追いたいと思います。

グループ部門 優秀賞

「宮島、ハワイ、そして地球」

広島県立国泰寺高等学校 2年

濱本 拓磨さん、布下 昇吾さん
中下 詩織さん、西村 翼さん
中村 宗利さん

1 研究の動機

現在世界で起こっている環境問題には、酸性雨、温暖化、海面上昇、砂漠化などがある。20世紀初めの頃のイギリス産業革命から現代に至るまで、世界の経済はめまぐるしい成長を遂げ、それによつて、私たちの生活は豊かになった。だが、その一方で環境破壊という深刻な問題をつくり出してしまった。そして、その環境破壊はすでに私たちの生活を脅かしている。

例えば、日本三景の一つ安芸の宮島、その宮島にある厳島神社は、世界遺産にも登録されているが、数年前の台風19号で深刻な被害を受け、その復興間もない今年9月、台風18号で再び甚大な被害を被った。国宝「左楽房」が倒壊し、他の建物も一部破壊され、海に流されてしまった。

しかし、宮島がこうした大きな被害を受けた原因は台風だけではない。実は海面上に造営されている厳島神社の本殿は、近年満潮時になると回廊がしばしば水に浸かるようになっていたのである。それが建物の老朽化に拍車をかけ、台風による被害を増大させた。なぜ、回廊が水に浸かるようになったのか、その背景にあるものは地球温暖化による海面上昇である。私たちは、この宮島という身近なところで起こった問題から、その原因である環境問題について考えてみることにした。

2 見えない問題？（酸性雨）

自動車、工場、発電所、ビルのボイラー、ゴミの焼却などで石油や石炭などを燃やす時、二酸化硫黄と言われる汚染ガスが大気中に放出される。これらは大気中で硫酸や硝酸に変わり、再び地上に戻ってくる。大気中に出たガスが雲をつくっている水滴に溶け込んで、雨や雪や霧として地上に戻ってくるものである。このとき、硫酸や硝酸がたくさん溶け込んでいると、雨水は強い酸性を示すことがある。これが酸性雨である。

北米やヨーロッパでは、酸性雨による湖沼や森林などの生態系への被害、あるいは酸によつて腐食する大理石や金属などで造られた建造物、特に歴史的遺跡や石像などへの被害が早くから問題となり、昭和54年には「長距離越境大気汚染条約」(ウィーン条約)が締結され、これに基づき国際的取り組みが進められてきた。

日本では足尾鉍毒事件が有名であるが、この事件以外でも、現在関東地方においては、杉の木が弱って先端部分の葉がなくなったり、枯木が増加したりする被害が出てきている。日本で降る雨は、どこであつてもPH4.5〜5.5であると言われ、酸性の度合いが強くなっている。

酸性雨は、従来先進国を中心とした問題とされていた。しかし、近年では経済発展が進んでいる開発途上国でも、深刻な問題となつてきており、中国大陸など東アジアでも酸性雨問題が深刻化する虞があると考えられている。

このように、酸性雨について調べてみると、問題の重要さに気づかされるが、実際には日々の生活の中で酸性雨を意識する場面は少ない。しかし、被害が目に見えるようになったときにはすでに

遅い。これまでの様々な災害でも、いったん起きてしまったら元通り回復することは不可能であるか、あるいは回復までに長い時間がかかってしまうのである。

酸性雨は森林破壊、砂漠化等の問題を引き起こすものとしてその対策が急がれるが、最も重要なのは、酸性雨問題に対する認識を深めることではないだろうか。気づかないところで破壊が進んでいることに目を向けて、環境問題に関心を持つ必要がある。

3 見えない問題？（砂漠化）

砂漠化が最も深刻な問題となつているのはアフリカだ。現在砂漠化が進んでいるのは、アフリカが3割、アジア（中東）が2割、残りがその他の地域となっている。もともと乾燥した地域であるアフリカは、今やその3分の2が砂漠または乾燥地となり、この乾燥地域における耕作地の4分の3が、ある程度の土地荒廃の影響を受けていると言われる。

砂漠化の原因としては、過放牧・過耕作・薪炭材の過剰採取などが挙げられ、これらを抑制しなければならぬが、実際には、多くのアフリカ諸国では、たびたび深刻な干ばつに見舞われ、その干ばつを乗り切るためにより一層の自然資源の過剰採取を行わなければならぬ。悪循環に陥っているのが現状だ。

これらが意味していることは、砂漠化という問題は、単に自然環境の変化やその影響について考えるだけでは解決しないということである。なぜなら、過放牧・過耕作・薪炭材の過剰採取などは貧困や人口増加、食料不足等の社会的問題によつて起こるからである。砂漠化が進んでいるのは、主として発展途上国である。これらの国々における貧困等の諸問

題の背景には、先進国との経済格差の問題がある。いわゆる南北問題だ。

日本にいる私たちには、現地に行かない限り、砂漠化の実態に触れることはない。その問題点は見えにくい。しかし、砂漠化の原因を考える時、私たちもその原因に関わりがあることを知らなくてはならない。環境問題は、決して自然環境だけを対象とするものではない。むしろ、その背景にある人間の社会に目を向けていく必要がある。そして、さらに重要なのは、どのような問題も、他人ですませることはできず、自分自身につながっていることを自覚することである。

4 志を持つ

海面上昇の原因は森林が減少したり、車の増加によって排気ガスが多量に排出されたりすることによって、二酸化炭素が増加したことである。海面上昇によって私たちは今重大な問題を抱えている。例えば、前述した厳島神社の被害もその一つである。その他には、南太平洋にあるツバル諸島の問題がある。この島々は海面の上昇によって、将来なくなってしまうと言われている。そのため、現在ツバル諸島では移民問題に直面している。

さらに、海面上昇の影響による高潮で、家を失ってしまった人々もいる。つまり、今、私たちは見慣れた土地を失ってしまった。危険にあるのである。しかし、それらの要因をつくり出したのは、他でもない、私たち自身である。すでに述べてきたように、地球環境問題のほとんどは人間が自分たちの発展のためにつくり出してきたものだからだ。つまり、私たちは、私たちがつくった原因によって、住む場所を失ってしまうのである。

自分たちでつくった原因で起こった出来事であれば、その進行を止めることは当然であろう。原因から分かるように、海面上昇は地球の温暖化の進行をとめる対策を行えばくい止めることができる。地球環境問題は相互に関連しあっている。同時に、私たち一人一人が、全ての問題につながっている。そのことをもっと自覚すべきではないだろうか。

先日、ノーベル平和賞を受賞したケニアのワンガリー・マタイ氏は、砂漠化するアフリカの大地に長年植林緑化活動を続けてきた功績を認められた。マタイ氏の志に学ぶところは大きい。すぐにマタイ氏と同じことができなくても、植物を育てることなど小さなことでもいい。自分自身の身の回りで出来ることからやってみることが大切だ。

5 私たちができること

現在東京地区の硫黄酸化物の排出量の約半分を占めているのは、ディーゼル車の排気ガスである。ディーゼル車は、ガソリン車に比べ、硫黄酸化物の排出量が高るかに多い。もしディーゼル車が環境に与える問題に対して認識が浅ければ、ディーゼル車の削減は難しいにちがいない。ここでも私たちの環境問題に対する自覚が問われている。メーカーに対して、ディーゼル車を削減すること、今以上に電気や水素など、環境を破壊しない燃料を使用する自動車の開発・実用化を強く求めていくことも大切であろう。

酸性雨の対策として取り組まなければならぬのは、ディーゼル車の削減だけではない。石炭・石油などの化石燃料の使用削減、越境して飛来する酸性ガス対策、国内の窒素酸化物などの排出抑制など、どれも重要な対策である。これらの対策について理解し、よりスムーズに

対策が進むよう支援するのも、私たちにできることの一つである。

砂漠化の問題を解決する取り組みとしては、1960年代から1970年代のアフリカ・サヘル地域での大干ばつを背景に、国連砂漠化防止会議（UNCCD）が組織された。他には、砂漠化防止行動計画（PACD）の策定や砂漠化防止条約（1994年6月）の締結など、たくさんの取り組みがなされている。身近な対策としては、ポプラ、松などの植物を植林するのがよいとされている。一人一人が自分の身の回りでマタイ氏のように、強い意志を持って環境を守ろうと行動すれば、問題は少しずつ、確実に解決に向かうはずである。

温暖化による海面上昇が宮島の被害を大きくしたことを知った時、私たちは、環境問題が見えないところで、どんどん進行していることに気づかされた。

修学旅行で行ったハワイの自然は、美しく雄大だった。その美しい自然は、私たちが環境問題に対して鈍感であれば、いつか失われてしまうかもしれない。私たちは自然からたくさんの恩恵を受けている。だが、受けるばかりでいいだろうか。人間が自然に与える影響が大きいからこそ、人間には自然を守る義務がある。そのような自覚をもってこそ、宮島の自然も、ハワイの自然もその美しさを維持することができるだろう。私たちに必要なのは、一人一人が、この地球環境に対して責任を負っているという自覚である。

グループ部門 審査委員特別賞

「現代社会における新聞の役割」

山口県立厚狭高等学校 2年

千原 恵里さん

河村 実紗さん

厚狭高校北校舎新聞部員二名、これが現在の私達の状況だ。私たちは、社会における新聞が国の知性を象徴し、国の顔であると同様に、学校新聞は学校にとって、生徒にとって無くてはならないものと確信して、使命感を持って活動してきた。しかし、最近私たちは迷いを感じ始めた。私たちの学校の新聞部が廃部の危機に直面しているように、さまざまなメディアが存在する現代社会においても「新聞」という存在が危機に瀕しているのではないかと。もし、「新聞」の存在意義が無くなってきているのであれば、学校新聞も同じことではないかと考え始めたのである。

そこで私たちは、「現代社会における新聞の役割」について研究し、それをもとに、高校における学校新聞の役割も問い直してみようと考えた。2004年、十月四日、シアトルマリナーズのイチロー選手が年間安打の新記録を達成した。新聞の号外も発刊され、誰もが知っているであろうこの出来事について、人々は最初はどのような方法で知ったのかについて、私たちは厚狭高校生三五〇名、教職員二十四名にアンケートを実施し、新聞情報の価値について考察する調査をスタートした。

結果は、テレビが89・6%と大部分を占めた。新聞という回答は3・8%であった。その他としては、「人づて」「携帯」「インターネット」という回答であった。現代社会における人々の情報入手手段として、テレビは抜き出ている。また、情報の早さについても、新記録達成

の件については、テレビでは既に十二時間前に情報を提供しているが、新聞の号外配布は午後二時頃であり、新聞は大きく後れをとっている。しかし、私たちはアンケートの回答の中で、この情報入手手段を、少数ではあるが「新聞」とした回答に注目して詳細に検討してみた。そして、情報入手手段がテレビではない理由を個別に聞いてみた。「外出をしていため号外で知った」「ずっと勉強していてテレビは見えない」「部活動していたので夕刊で知った」など、テレビを見る時間がとれなかった人については新聞で情報入手した人が多いことが分かった。勿論、個別に調査をすれば外出していたとしても、やはり、帰ってテレビニュースなどで知ったという意見の方も多いであろうことは推測できる。しかし、それでも、テレビとは異なる新聞による情報提供の有効性の一面は見出せたように思う。

次に、圧倒的にテレビに情報入手の手段として後れを取っているかに見える新聞について、もう少し研究してみたいと思う。

まず、我が国の日刊紙の販売部数について調べた。日本ABC協会「新聞発行レポート半期普及率2003年一月～六月平均」によれば、全国合計で、朝刊の場合、読売新聞一〇、〇二一、三九六部、朝日新聞八、二二〇、七九四部、毎日新聞三、九三〇、五八一部という三紙だけでも驚異的な数字となっている。また、厚狭高校のアンケート調査でも、家庭で新聞を購読している割合は98%を超えている。また、少し古い資料ではあるが、1989年と1990年十月のユネスコ文化統計年鑑のデータから見ると、新聞発行部数は日本は七、二五二万部で旧ソ連に次いで世界第二位であ

る。これらを見ていくとき、日本において、新聞は人々に大きく支持されていることは確かであると考えられる。

現代社会でこれほど普及している新聞は、人々が必要不可欠と感じている証明とも言えるのではないか。それは日刊新聞の歴史からも証明される。世界最古の日刊新聞は1650年、ドイツのライプチヒで創刊された「アインコメンデン・ツァイトウンゲン」だと言われている。それから百年後、ロンドンで日刊紙が5紙、週三回発刊の新聞が6紙、総部数は十萬部になった。一方、日本の日刊新聞第一号は、1871年一月二十八日に横浜で発行された「横浜毎日新聞」である。日刊新聞は世界的に見れば、三五〇年以上、日本においても一三〇年以上発行が続けられ、人々に読み続けられているのである。

新聞がなぜここまで読み継がれているのかという疑問について、次の調査結果も解答になっっているように思う。「日本新聞協会研究所 第二回全国新聞信頼度総合調査」で、正確性、社会性、日常性、公平性、反映性、品位性、信頼性、人権配慮の八項目についての、テレビと新聞の比較では、全てその肯定的評価は新聞が上回っている。特に信頼性については、新聞89%、テレビ55.3%、品位性は新聞72.7%、テレビ33.0%、人権配慮は新聞61.7%、テレビ34.8%と、この三項目については、その肯定的評価が、特に大きくテレビを上回っている。現代社会にメディア多しといえども、そして、テレビにその速報性の地位は奪われたとしても、人々の信頼は圧倒的に新聞にあるというのが事実だと考える。

この論文執筆中の十月二十三日午後五時五十六分頃、新潟県を中心に「新潟

中越地震」が発生した。今もその被害を受けられた方は悲しみの最中にある。今回も本校高校生の二十数名に最初に知ったのは何のメディアであったかを聞き取り調査してみた。その結果は新聞一名、他はすべてテレビであった。しかし、多くの人はテレビで知ったが、再度、翌朝の新聞を読み、地震の詳細、被害を受けられた方の様子やどんな支援ができるのかなどを確認している。特に、今回のような大きな出来事の場合のように、続報性、記録性を要求され、人々が詳細を確実に知りたいときには新聞の方が優れているように思われる。ここで、今回の地震を例に私たちの経験を通してテレビと比較して新聞の優れている点をまとめてみた。

1 簡便性

テレビはスイッチを入れない限り、またその瞬間に見ていない限り情報を手でできないが、新聞は手にとりさえすれば、いつでも、どこでも、電気がなくても手に入れることができる情報である。

2 情報の幅広さ・詳しき

新聞はあらゆる情報を毎日提供するメディアで、短時間であらゆる情報を幅広く詳しく手に入れられる。今回も地震の様子や経緯を知るためにテレビを見ていけば長時間かかるが、新聞を読めば二、三〇分で知ることができる。

3 記録性

これは圧倒的に新聞が優れている。今回の執筆のために、もう一度日時や場所を確認しようとした際、私たちがまず検索したのは新聞である。

4 分析力

新聞には、社説やコラムなどを始め、様々な形で出来事を論評したり原因を分析したりしている。私たちがこの地震の原因や今後の動き、何ができるかなどを考えたいとき新聞は大きな手助けになった。

以上のように考察してきて、私たちは、多くのメディアが存在する現代社会において、新聞の役割は重要であり、新聞は多くの人々に必要とされているという一つの結論にたどりついた。

それでは、学校新聞はどうかという点について考察しよう。まず、私たちの地域にある近隣の公立高校十校で学校新聞が発行されているのかを調査してみた。これについては十校すべてが発行している。次に新聞部の存在については、新聞部は七校にあり、他の運動部や文化部の存在の割合（例 野球部八校）と大差ないことが分かった。ただ、現在は存在しない三校にも以前は新聞部が存在していたという事実もある。

その三校の中の一校に何故廃部になったのかを聞いたところ、部員が急激に少なくなり、部として成立しなくなったということであった。現在学校新聞については、委員会で作成しているそうである。廃部への経緯は現在私たちが抱えている問題と同様である。

本校のアンケートで、学校新聞を読むかという調査では、一年生は46%と半数以下であるが、学年が進むとともに読む割合は増えている。三年生では80%が読むという結果である。日本新聞協会研究所の調査によれば、二十歳未満で新聞を毎日読む割合は、50・7%となっており、一般の新聞よりは学校新聞を身近に感じて読んでいると考える。

また、新聞販売部数について、都道府県別に見ると、三十八都道府県で第一位

の販売部数はその地方に根付いた地方新聞である。ただし、山口県は残念ながら地方紙の販売部数が少なく、第一位が読売、第二位は朝日、第三位が毎日となっている。

地方紙と学校新聞は、全国紙にはない共通点がある。読者が限定されている分、読者に近い存在で、読者の知りたい身近な情報やきめ細やかな情報が提供できるのである。私たち学校新聞を作るものにとつて、地方新聞がその地域の人々に愛され購読されている例が多いのは大いなる励ましになった。

私たちは学校新聞についても日刊紙と同じ結論を導き出した。高校の学校新聞は必要とされ支持されている。後は、私たちの取り組み次第である。現に私たちの近隣の高校で学校新聞を発行していない学校はない。私たちの厚狭高等学校新聞「朝陽」も一〇号の歴史を持つ。現在、若者の活字離れが言われ、社会への関心の低さが言われている。それを証明するかのように、新聞投稿欄も若い世代による投稿が少ない。朝日新聞と中国新聞で十日間にわたり、調査したところ、60代、70代が圧倒的に多く、20代、30代が特に少なかった。10代は新聞社が若い声を掲載しようという意図で10代向けのコーナーを設けているため多少、多くなっているだけに見える。このような現代社会だからこそ、学校新聞、そして、私たち新聞部の役割は重要だ考える。私たちは今回の研究で、私たちの役割が見えてきた。今後も、厚狭高校生の知性として活動し、問題提起を続けていきたい。私たちが社会人となつたときに、社会現象を正しく公平に判断できる大人となるためにも。